

J **apanese text**

2019年 春/夏号 日本語編

Works

水

画・文＝篠田桃紅

p.003

遠い国の山、
崖、そこのその木、
その燃える火の色、
谷底の石、石を洗う水音、色、
墨と、硯と、水

口絵

**春の慶びをいける
草月コレクションの名品に**

撮影＝鈴木一彦

いけばな＝草月流 第四代家元 勅使河原 茜

文＝古屋留美

p.006

個性を尊重した自由ないけばなの表現を求め、約90年前に創流した草月流。代々の家元は多くの芸術家と交わり、貴重な美術品を蒐集してきた。草月コレクションと呼ばれるそれら名品に、第四代家元が春の慶びをいける。

あけぼの

白と黒の二匹の仔犬が愛らしく戯れるさまを、ふくよかな立体感とともにふんわりとした毛まで細やかに表現した俵屋宗達の軸。小さな花が微笑むように咲くすいせんと、のびやかな枝の先にやわらかな花を咲かせるぼけ。春の朝を思わせる淡く優しい光が差し込む中、ガレの花器が奥ゆかしい輝きを放つ。草月会館・日本間にて。

花：ぼけ、すいせん

花器：色硝子果実彫刻花生 エミール・ガレ

軸：狗子図 俵屋宗達

p.007

息吹

江戸後期の禅の画家、仙厓^{せんがい}を師と仰ぎ、前衛書道家、森田子龍^{しりゅう}と交流のあったベルギーを代表する画家、アレシンスキー。枠を設けて描く独特のスタイルはコミック本からの影響だという。彼らしい世界観が遺憾なく発揮された赤と黒の画面が醸す緊張感と、鉄絵が施された李朝俵壺のモノトーンの狭間で、糸ばしよとグロリオーサの蕾のグリーンが、新しい芽吹きを伸びやかに表現している。草月会館・貴賓室にて。

花：糸ばしよ、グロリオーサ

花器：李朝鉄絵俵壺

額：宇宙 ビエール・アレシンスキー

p.008

花舞

草月流の創始者、勅使河原蒼風^{そうふう}が、その晩年に深い親交を結んだ洋画家の須田剋太^{こくた}。金屏風に描かれたしだれ桜は、空から枝花が降り注ぐかのよう。まさに満開のしだれ桜を下から包み込むように、剛柔それぞれの表情を湛えた枝ものをいけ、春の躍動感を表現。花器の口もとにそっといけられたスイートピーが和みを誘う。草月会館・貴賓室にて。

花：桐、苔まき、ゆきやなぎ、スイートピー

花器：鉢 - II 勅使河原宏

屏風：枝垂れ櫻 須田剋太

p.010

風と光と

赤坂御用地や明治神宮外苑の緑の先には、東京五輪を来年に控えて刻々と変化を遂げる街、ほんのりと霞がかかった空、

吹き渡るやわらかな風。家元自らがデザインしたガラス器では、まさしく今の東京が春の陽光とともに煌めいている。淡い色のエリカ、カトレアとともに、大ぶりのエアープランツが深呼吸をするかのような。草月会館・屋上にて。

花：エアープランツ、エリカ、カトレア
花器：ガラス花器 勅使河原 茜

心をいける、心を動かす

「型」にとらわれることなく、常に新しく、自由にその人の個性を映し出すいけばなの流派として誕生した草月流。花はいけたら、人になる——初代家元・勅使河原蒼風の精神は、創流 90 年余を迎えた今も脈々と受け継がれ、時代と向き合いながら自由闊達に表現するいけばなとして世界中から親しまれている。

草月流の家元は代々、創作の糧として幅広いジャンルのアーティストと交流し、自らも陶芸や書、舞台演出など、いけばなにとどまらない才能を発揮してきた。第三代家元で映画監督の勅使河原 宏の次女として生まれ、2001 年に第四代家元に就任した勅使河原 茜もまた、ダンスや音楽、現代アートといった他分野のアーティストとのコラボレーションに積極的に取り組み、自身も作陶を行うなど、いけばなの無限の可能性に挑んでいる。こうした四代にわたる芸術家との交流の中で蒐集してきた数々の美術品、それが「草月コレクション」だ。

今回、草月コレクションのある空間に、第四代家元の茜が春の慶びを表現する花をいけた。「どんな空間にも呼応し、空気を変えるのが草月の花」と自身が語る通り、彼女が動き始めると、古今東西のアートが強烈な存在感を放つ空間に、瞬間に春の息吹が吹き込まれていく。「花をいける空間に立って、その瞬間に感じたインスピレーションでつくり上げると、いいものができると思っています。いけばなは心をいけるもの。同じ器、同じ植物でも、時間・空間・人間が変われば全く新しい表現が生まれ、人の心を動かしていく——。それが草月のいけばなの原点です」